

西村京太郎

トマス・ニステリー傑作集

The Target of Police Inspector Totsugawa

●Kotaro Nishimura

十津川警部の標的



十津川警部が狙撃された！



光文社文庫

トラベル・ミステリー傑作集

とつがわ
十津川警部の標的

著者 にし むら きよう た ろう
西村京太郎

1997年9月20日 初版1刷発行

発行者	濱井武
印刷	大日本印刷
製本	大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8113 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kyōtarō Nishimura 1997

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-72464-7 Printed in Japan

Ⓔ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

江苏工业学院图书馆

トラビル・スチール傑作集

とつがわ
津川警部の標的
蔵書章



目次

十津川警部の標的 ^{ひょうてき}	5
十津川警部「いたち」を追う.....	113
十津川、民謡 ^{うた} を唄う.....	191
解説 新保博久 ^{しんぼ ひろひさ}	271

十津川警部の標的

1

大都會で殺人を犯した場合、犯人は、どこへ逃げるだろうか？

故郷がある人間ならば、たぶん故郷へ逃げるだろう。

故郷だけが、犯罪者になった自分でも受け入れ、匿^{かくま}ってくれると錯覚^{さつかく}するのだろうか？

いや、錯覚したくなるのかもしれない。

では、故郷のない人間はどうだろうか？ そのまま、大都會の混雑の中に、逃げ込もうとするだろうか？ それとも一刻も早く、殺人の現場から、遠く離れようとするものだろうか？

事件のないとき、十津川^{とつがわ}は、ときどきそんなことを考える。

六月二十五日に起きた殺人事件で、はしなくも、その問題に直面することになった。

事件そのものは簡単だった。

金を貯^ためていたクラブホステスが、その金目当てに、知り合いの男に殺された事件である。

店での名前は、ひろみ。本名は、白石^{しろいし}かおり、三十歳だった。

彼女がこつこつと金を貯め、洒落^{しゃれ}た食べもの店を出したがっていることは、同僚のホステスの何人かが知っていた。

事件当日、彼女は、いったん店に出てきたが、

「いい物件が見つかったので、契約したい。九時に早退をさせてください」と、いった。

話を聞くと、六本木の雑居ビルの地下にいい出物があり、それを、今夜、五百万円の手付金を払って、契約するのだといい、昼間、銀行でおろした札束を見せた。

ママは、どうもその話を眉唾だと思ったと、あとになって、十津川に証言している。

そのとき、ママは、どこの誰が持ってきた話なのかと、聞いてみた。

「そしたら、竹田が持ってきた話だっていうんですよ。竹田という男はね、背が高く、ハンサムで、外見はいいから、前にうちで、ボーイとして、使ってたことがあるんですけどね。機転は利くけど、手癖が悪くて、店の金を盗んだりしたんです。警察に突き出してやろうと思っただけど、竹田が涙を流して謝るもんだから、馘にするだけで勘弁してやったんですよ。今から考えると、あれは空涙だったのかもしれないねえ」

と、ママはいった。

そんなママの危惧が適中した。その夜、白石かおりは新宿の中央公園内で、死体で発見された。首を絞められて、殺されていたのである。ママに見せた五百万円は、失くなっていた。

捜査に当たった十津川は、竹田淳、二十八歳を容疑者と断定し、上北沢にある彼のマンションに急行した。

だが、竹田は、すでに逃亡した後だった。

これが、六月二十五日に起きた殺人事件である。

2

竹田は、東京の目黒区洗足で生まれ、東京の小、中、高校を卒業し、東京のN大に入っている。

そのころ、両親が相ついで亡くなった。それが原因でもないのだろうが、竹田は、大学を中退している。

その後、何をして暮らしていたかはっきりしないが、友人や親戚に迷惑をかけつづけ、顰蹙を買っていたらしい。

二十五歳のとき、詐欺を働き、揚句に相手に重傷を負わせて、一年間、刑務所に入っていた。このときの詐欺は、結婚詐欺だった。

クラブのボーイになったのは、その後である。

彼を知る人たちが異口同音にいうのは、竹田という男は、調子がいいが、嘘つきで、カツとしやすいということだった。そのほか、女好きで、バクチ好きという声も多かった。

金に困っていたという人も多かったから、五百万を奪うために、白石かおりを殺したにちがいないと、十津川は考え、ほかの刑事たちも同じ意見だった。

従って、最初の捜査会議の議題は、竹田がどこへ逃げたかという一点に集中した。

「彼に故郷があれば、まずそこへ逃げたと考えますがね」

と、亀井刑事がいった。

「カメさんは、東北の生まれだから、東北へ逃げるかね？」

と、十津川がきいた。

「ええ。間違いなく、そうしますね」

「竹田にだって、故郷があるじゃありませんか」

と、三田村刑事がいった。

「東京か？」

「そうです」

「君は、どこの生まれだったかな？」

「四国の高知です」

「それなら、故郷という感覚があるだろうがね」

「東京は違いますか？」

「私も、東京の生まれ、育ちでね。東京でも、神田、浅草あたりなら、そこが生まれ故郷という感じが持てるだろうが、私のように、東京でも郊外のほうになると、故郷という感覚はないね。変わり方が激しすぎるんだよ。建物も変わってしまったし、住んでいる人間も変わってしまった

うからね」

と、十津川はいった。

「竹田も、そんな感じでしょうか？」

と、西本刑事にしもとがきく。

「彼の場合は、もっとだろう」

と、亀井がいった。

「なぜですか？」

「東京には友人もいないからだよ。一匹狼を気取っていたらしいが、いいかえれば、毛嫌いされて、孤立していたんだ」

「知り合いの女のところ逃げ込んでいるということは、ありませんか？」

と、日下刑事くさかがきいた。

「金がなければ、女のところ逃げ込んだかもしれないが、竹田は、五百万という大金を手に入れたんだ。女の家隠れて、息をひそめているなんてことが、二十八歳の彼にできるとは思えないね」

と、十津川はいった。

「海外逃亡の恐れはありませんか？ 東南アジアとうなんにでも逃げれば、五百万で、贅沢ぜいたく三昧さんまいができるんじゃないありませんか」

と、日下がいう。

「竹田は、パスポートを持ってないんだ」

と、亀井があっさり否定した。

「それなら、日本のどこかに逃げたということでしょうか？」

と、北条早苗刑事がきいた。

「日本も、探すとなると広いよ」

西本が、小さく肩をすくめて見せた。

「一度でも行ったことのある場所に、逃げるものでしょうか？ それとも、まったく知らない土地に逃げるものでしょうか？」

と、三田村が十津川にきいた。

「初めての土地は、不安があるだろう。いざというとき、土地勘がないと、逃げるのが大変だからね」

と、十津川はいった。

「もう一度、竹田のマンションに行ってきます。何か、手掛かりがあるかもしれませんから」と、西本がいい、日下を連れて、飛び出していった。

その西本から、しばらくして電話が入った。

「面白いものが見つかりました。万年床まんねんどこの下から、北陸ほくりくの観光案内が見つかったんです。主に、

名所、名湯めいとうの案内で、今年の二月の日付スタンプが押してあります」

「二月に、竹田が、北陸へ遊びに行ったということかもしれないな」

「北陸には、有名な歓楽地帯がありますから、若い竹田が楽しんできたとしても、おかしくはありません。とにかく、すぐ持って帰ります」

と、西本はいった。

十津川は、北陸地方の地図を取ってこさせ、それを机の上に広げて、西本たちの帰りを待った。

西本と日下が、帰ってきた。

二人が持ち帰ったパンフレットには、「加賀温泉駅かがおんせん」とゴム印が押され、二月十六日の日付スタンプも押されている。

竹田が、二月十六日に加賀温泉駅に降りて、駅でこのパンフレットをもらったのだろう。

北陸本線ほくりくの加賀温泉駅周辺の観光地と主な温泉が、写真入りで載っている。

「五百万あれば、楽しく遊べますよ」

と、西本がいった。

「北陸か」

と、十津川が呟つぶやいた。

「北陸ということに、何か意味がありますか？」

と、亀井がきいた。

その質問に対して、十津川は、

「事件を起こした犯人が、逃げるとしたら、北にするだろうか、それとも南にするだろうか、考えたことがあるんだよ」

と、いった。

「そうですね。私が犯人なら、北へ逃げますね。北には沈黙のイメージがあって、その沈黙の中に、逃げ込めるような感じがしますからね。沈黙が包んでくれる気がすると、思いますよ」

と、亀井はいった。

「私も、北へ逃げると思うね」

と、十津川もいった。

ただ、理由は、亀井とは少し違っていた。

犯罪者は追われることで、悲愴感ひそうかんに包まれる。その悲愴感には、北の空気がふさわしいと、十津川は思うのだ。

「カメさん。北陸へ行ってみよう」

と、十津川は亀井にいった。

これは、一つの賭けだった。

竹田が、北陸へ逃げたという確証はない。本来なら、まず竹田を全国手配し、その結果を待って、動くのだが、十津川は今回は賭けに出た。

一つには、この賭けに、十津川は、かなりの自信があったからである。ただ、賭けはあくまで賭けだから、北陸へは亀井と二人だけで行くことにし、ほかの刑事たちは、東京の捜査本部に残すことにした。それに、絶えず連絡がとれるように、十津川と亀井は、携帯電話を持参することにした。

十津川が賭けに出たもう一つの理由は、竹田の動きに不安があったからである。

竹田は、金を奪うために、簡単に女を殺している。凶暴なところがあるのだ。今は、手に入れた五百万の金を持っているが、追われることを知っているから、派手^{はで}に使ってしまうだろう。普通なら、五百万は大金だが、今回の場合は、何日ももたないかもしれない。

もし、竹田が五百万の金を使い切ってしまうえば、新たに金を手に入れようとして、第二の殺人を犯す可能性が大きい。それだけは、絶対に防ぎたい。だから、多少の危険はあっても、賭けに出たのである。

二人は、六月二十六日の一〇時五五分羽田発小松行きはねだのJAS 261便に乗った。
小松空港に着いたのは、十一時五十五分である。

日本海沿いに作られた滑走路は、雨に濡ぬれていた。

梅雨前線ばいりゅうが上にあがって、おかげで、東京は晴れていたのだが、北陸は、前線がかぶさって、雨が降っている。

「いい雨だ」

と、十津川がいった。

亀井が、変な顔をして、

「警部は、雨が嫌いだったんじゃないですか？」

「そうなんだが、竹田のことを考えてね。もし、竹田がこの北陸へ来ていたら、この雨だし、人に顔を見られるのも嫌いやだろうから、じっと動かずに、温泉のホテルに閉じ籠こもって、酒と女だろうと思ってね」

と、十津川はいった。

二人は、迅速じんそくに動けるようにと、レンタカーを借りて、まず北陸本線の加賀温泉駅に向かった。

北陸の道路地図を見ながら、雨の中を車を走らせる。

加賀温泉駅は、小さな駅だった。駅前の広場からは、山代温泉やましろうや山中温泉やまなかへ行くバスが出て